



渡邊利三国際奨学金年次報告書

2025年度

寄付者から難民の若者へのメッセージ



パスウェイズ・ジャパン 名誉会長
渡邊 利三氏

私は多くの難民を受け入れてきたアメリカで長い間仕事をしてきました。祖国を逃れ、難民としてアメリカで高等教育を受け、アメリカの社会に溶け込んで活躍してきた人々を私はたくさん見てきました。アメリカはベトナムからの難民を多く受け入れ、彼らに高等教育の機会を与え、多くの難民たちがアメリカの社会で活躍しています。2022年3月に亡くなったアメリカ初の女性国務長官オルブライト女史は東欧からの難民でした。彼女は難民の子供としてアメリカで高等教育を受け、のちにクリントン政権で国連大使、そして、国務長官として活躍しました。

日本は長い間難民を受け入れない国でしたが、私は日本へ逃れてきた難民の人たちも、日本で高等教育を受ける機会を与えられることにより、日本社会でも活躍できることを皆さんに証明してもらいたいです。私は日本が他の先進国並みに多様性を受け入れる国になることを願ってこの奨学基金を創設しました。皆さんは日本で高等教育を受けたのち日本社会で活躍するかもしれません。また、将来、祖国に帰って活躍するかもしれませんが、それはそれで結構です。しかし、いずれにせよ皆さんが日本と祖国の架け橋になることを私は望んでいます。皆さんの夢が何であれ、自分自身のものにしてください。



代表メッセージ



パスウェイズ・ジャパン
代表理事 折居 徳正

本年度の渡邊利三国際奨学金には、従来の3倍以上となる226人の応募があり、その中から25人を奨学生として迎えることとなりました。応募者、奨学生ともに過去最多となり、多くの方々から寄せられる期待の大きさを実感しています。奨学生の皆さんは、紛争や人権侵害、抑圧など、困難な状況を逃れて日本にいられた方々です。日本語を学び、日本語で専門分野を学び、研究するために重ねてきた努力に、心から敬意を表します。

現在、日本社会では、外国にルーツを持つ人々をどのように受け入れ、共に社会を築いていくかについて、さまざまな議論が行われています。日本の言語や文化を学び、社会の一員として学びを生かそうとする奨学生や卒業生の姿は、多様な人々が共に学び、働き、活躍する社会の可能性を示しています。本奨学金は、渡邊氏の「多様な人材を受け入れ、一人ひとりが活躍できる社会を日本に実現したい」という願いから始まりました。これまでに多くの卒業生が日本の企業や社会で新たなキャリアを築いています。奨学生と卒業生の歩みを支え、学びと成長の機会を広げることを通じて、多様な背景を持つ人々が共に未来を切り拓く社会の実現に貢献してまいります。

渡邊利三国際奨学金について

パスウェイズ・ジャパンの「高等教育支援」事業では、日本で暮らしている難民や、難民の状況となって国外から日本に受け入れられた人々の内、進学機会の限られている人々に対して、渡邊利三国際奨学金によって高等教育の機会を提供します。難民の背景を持つ人々の高等教育進学率は、世界全体でわずか9%にとどまり（UNHCR 教育報告書2025）一般の若者に比べて著しく低くなっており、SDGsの枠組みの中、2030年までに15%を達成するため、各国で取り組みが進められています。パスウェイズ・ジャパンは、渡邊利三国際奨学金により、日本でこの取り組みを推進し、2030年の国際目標達成に貢献します。そして、難民となる困難な経験を経た若者達の持つ能力と可能性を信じ、高等教育を受ける権利と機会が制限されている状況の改善、卒業後の就職と自立、そして彼らの夢の実現に寄与することを目指します。

対象者：

難民・避難民の背景を持つ若者
※留学や家族滞在、特定活動、定住者など様々な留資格で滞在する若者が応募可能です

対象教育機関：

短大から博士課程まで、国内のいずれの大学への進学も柔軟に支援します

支援内容：

- ・学費
- ・生活費（月5万円～7万円）



2026年度渡邊利三国際奨学金募集結果と奨学生報告

2026年度の渡邊利三国際奨学金は、前年度を大きく上回る226名からの応募があり、選考委員会による書類と面接の審査を経て、この度25名の奨学生を選考しました。

奨学生たちは、2026年度に大学学部へ進学する新入生から博士課程に在籍する大学院生まで、さまざまな段階で学びを深めています。専攻も、工学、経済、日本語教育、観光、医療・看護、など幅広い分野にわたります。構成は女性16名、男性9名と女性が多く、出身国はミャンマー、アフガニスタン、シリア、ウクライナ、カメルーンの5か国です。来日に至る経緯も一様ではありません。内戦や紛争の影響を受け教育を通じて日本に避難して来た人、家族が難民として来日し幼少期から日本で育った人、高校による受け入れで日本に避難した人など、それぞれ異なる背景を持っています。共通しているのは、困難な状況に直面しながらも学びへの意欲を失わず、日本の大学・大学院への進学を実現した点です。現在は、それぞれの専門分野において研鑽を積みながら、日本社会のみならず、出身国や国際社会への貢献を見据え、高い志をもって歩みを進めています。

パスウェイズ・ジャパンは、渡邊利三国際奨学金を通じて彼らの学業と生活を支え、難民となる困難な経験を経た若者達が、自らの目標を実現できるよう、今後も支援を続けていきます。

支援決定奨学生出身国 (個人名は非公開)	性別	進学先・専攻 (大学名は非公開)
ミャンマー	女性	心理学
ミャンマー	女性	人間科学
ミャンマー	女性	経営学
ミャンマー	男性	国際教養学
ミャンマー	女性	看護学
ミャンマー	女性	農学
ミャンマー	女性	観光学
ミャンマー	男性	国際教養学
アフガニスタン	女性	医療保健学
アフガニスタン	女性	国際関係学
アフガニスタン	男性	情報科学
シリア	女性	社会学 (心理学)
アフガニスタン	女性	大学院博士課程 (医学研究)

- 応募状況
(1) 募集期間 2025年10月27日 (月) ~2026年1月5日 (月)
(2) 応募総数 226件
- 選考委員会
・ 選考方法
選考委員会を設置し、書類選考および候補者との面談により、支援内定者および補欠者を選定。選考委員会は、難民支援、人道支援及び高等教育に豊富な知見を有する、大学関係者、法曹関係者等で構成。
・ 面接
- 新規応募
日時：2026年2月1日 (日) 9時30分~18時40分 場所：都内会場
2026年2月4日 (木) 15時00分~16時30分、オンライン面接
- 継続応募
日時：2026年2月3日 (火) 15時00分~19時00分 オンライン面接
2026年2月5日 (木) 15時00分~18時30分 オンライン面接
- 選考結果
上記の通り選考の結果、以下 25名の奨学生が決定。

支援決定奨学生出身国 (個人名は非公開)	性別	進学先・専攻 (大学名は非公開)
ミャンマー	女性	看護学
ミャンマー	女性	日本語・日本文化学
ミャンマー	女性	看護学
ミャンマー	女性	工学 (機械・電気工学)
ミャンマー	男性	工学 (機械・電気工学)
ミャンマー	女性	英語英文学
ミャンマー	男性	工学 (建築)
アフガニスタン	女性	経済学
ウクライナ	男性	異文化コミュニケーション学
カメルーン	女性	人文学
シリア	男性	理工学 (機械)
アフガニスタン	男性	大学院博士課程 (グローバルスタディーズ)

授与式の開催一奨学生が学びに懸ける思いを語りました

2026年4月18日、都内にて奨学金授与式を開催しました。今年度は過去最多となる25名が奨学生に選ばれ、昨年度の卒業生や家族、支援者など約40名が集いました。一人ひとりが壇上に立ち、自身のこれまでとこれからを語る姿に、会場は励ましとお祝いの暖かな雰囲気に包まれました。



授与式の当日は、各奨学生がこれまでの経験と今後の抱負についてスピーチを行いました。これまでの経験や専門分野は異なりますが、母国での紛争や人権侵害など、様々な困難に直面しながらも、学ぶことに希望を見出し、日本の大学で学ぶ道を切り拓いてきました。スピーチの中では、それぞれの専門分野で学びたいことや将来の目標を具体的に語り、「将来は社会や地域の発展に貢献できる人材になれるよう努力していきたい」など、自身が成長して社会に貢献しようとする強い思いが、共通して語られました。

前年度からの継続支援が決まった奨学生からは、近況報告として、専門分野での学びの深まりや大学外での経験の広がり、新たな目標について話されました。また、イベントには、昨年に続き、元文部科学大臣の中川正春先生にもご参加いただき、「次の大きなステップを実現することに期待したい」難民・避難民の学生に励ましの言葉をいただきました。

また当日は、2025年度に卒業した奨学生も参加し、現在の仕事やこれからの目標について語りました。首都圏外で活躍している卒業生はオンラインで参加しました。「さらに成長して社会に貢献できる人材になりたい」「母国と日本をつなぐ存在になりたい」という言葉に象徴されるように、彼らの視線はすでに次の世代、そして社会へと向けられています。長く成長を見守ってきた大学関係者からも、力強いエールが送られました。

奨学生・卒業生が出身国や関心分野を越えて交流する様子からは、単なる経済的支援にとどまらず、互いに支え合いながら歩むコミュニティが育まれていることが感じられました。このつながりもまた、困難な状況にある難民・避難民の若者が前に進む力となります。

バスウェイズ・ジャパンはこれからも、奨学生一人ひとりの歩みに伴走しながら、学びを通じて未来を切り拓こうとする若者たちを支えていきます。

これまでのインパクト

奨学生の数：累計 **72名**

女性の割合： **約半数**

国籍： **6か国**

アフガニスタン ウクライナ
カメルーン シリア ミャンマー
トルコ（クルド）



イズンマウンさん（ミャンマー出身、心理学）



私はミャンマーのサガイン地方出身です。私の故郷は、現在も誘拐事件、強盗事件、殺人事件が多発している地域であり、周囲の村では空爆や衝突が起きるなど、非常に不安定な状況が続いています。医科大学在学中には非暴力デモに参加しましたが、平和的な抗議活動に対して発砲が行われ、同級生が命を落とす現実を目の当たりにしました。状況の悪化により大学を離れ、生きる意味を見失いかけた経験があります。

しかし、その経験が「心に深い傷を抱える人々を支えたい」という思いにつながり、現在は心理学を学んでいます。大学では、発達心理学や臨床心理学、社会心理学などを通して、人の心と行動への理解を深めたいと考えています。特に、戦争や避難生活など極限状況に置かれた人々の心理やトラウマについて研究し、実践的な支援につなげていきたいです。

将来は国際機関で児童福祉に携わり、戦争によって心に傷を負った子どもや若者たちの回復と成長を支えたいと考えています。どのような環境にあっても、子どもたちが安心して学び、希望を持って生きられる社会の実現に貢献したいです。また、ここまで学び続けることができたのは、家族や多くの支援者の皆さまのおかげであり、いただいた支援を将来社会に還元できるよう努力していきたいと思っています。

ブーウェーさん（ミャンマー出身、経営学）



現在、ミャンマーでは内戦の影響により、多くの人々が安心して暮らせない状況が続いています。私の家族も、電気や水が不安定な生活や将来への不安の中で暮らしており、2025年に発生した大きな地震では家も被害を受けました。

軍による政変が起きた当時、私はミャンマーで軍に反対するデモに参加していました。しかし、そのデモは銃で鎮圧され、仲の良かった友人が目の前で撃たれて亡くなりました。この出来事は今でも忘れることができません。

その後、戦闘は激化し、特に私の故郷であるサガイン地方では状況が深刻になりました。インターネットが使えなくなり、各地で爆発が起こるなど、日常生活が大きく変わりました。そのような中で、私は18歳のとき、日本で学ぶという夢を持って来日しましたが、正直に言うと、自分だけが安全な場所に来ることに葛藤もありました。

現在は大学で経営学を学んでいます。この奨学金のおかげで経済的な不安が軽減され、安心して学業に集中できるようになりました。将来は日本の自動車関連企業で技術や品質管理を学び、ミャンマーが平和になった時には、その経験を持ち帰り、日本とミャンマーをつなぐ存在として両国に貢献したいと考えています。

モンエイさん（ミャンマー出身、心理学）



私はミャンマーの大学で土木工学を学び、将来は大学で土木工学を教える教員になることを目指していました。しかし、2021年の軍事クーデターによって大学は休学となり、家族とともに安全な場所へ避難せざるを得なくなりました。その後、「何としても学びを続け、自分の将来を切り開きたい」と考え、家族と離れてヤンゴンへ移り、日本語インストラクターとして働きながら、日本留学に必要な知識と資金を準備しました。

2024年に日本の大学の留学生別科に奨学金生として入学し、現在は人間科学部へ進学し、都市デザインやウェルビーイングについて学ぶ予定です。ミャンマーでは、自然災害や政治的不安定の影響により、都市部・地方を問わず、日常生活に多くの不便があります。特に、冠水被害が起きる地域で暮らした経験から、防災・交通・通信を含めた都市計画の重要性を強く実感しました。

将来は、まちづくりの視点からこれらの課題に向き合い、持続可能で実効性のある都市づくりを通じて、人々が安心して快適に暮らせる社会の実現に貢献したいと考えています。そして、都市計画の専門家として、ミャンマーをはじめとする課題を抱える地域の発展に寄与していきたいと考えております。

ナヒードさん（アフガニスタン出身、医療保健学）

アフガニスタンの現在の政権下では、少女たちは教育を受けることができません。カブールにいた頃、私の夢は医学を学び、医師になることでした。しかし、状況の悪化によって、その夢は突然閉ざされてしまいました。それでも、どんな障害があろうとも、学ぶことへの情熱と、学び続けたいという願いを胸に抱き続けました。

現在、私は大学の放射線医学科で学んでいます。かつて思い描いていた医師への道とは少し異なりますが、医学と密接に関連しており、大好きな分野で歩み続けることができるのです。医療を通じて人々を助けるという同じ目標に向けた、新たな道なのです。

大学では、懸命に学び、知識を深め、社会に貢献するために必要なスキルを身につけることに尽力しています。

将来的には、無事に卒業し、社会に貢献できるキャリアを築くことが私の目標です。日本国内の地域社会に貢献するだけでなく、いつの日か、アフガニスタンの人々や、同様の課題に直面している人々の力になりたいと考えています。希望と知識、そして前向きな変化をもたらす存在になりたいと願っています。

ナジャさん（アフガニスタン出身、国際関係学）



アフガニスタンでは、2021年にアメリカ軍が撤退し、タリバンが権力を支配したことで、国の状況は大きく変わりました。父は仕事や教育を通じてアメリカや日本と関わりがあったため、家族の命が危険でした。また、タリバンが女性に対して教育、働くことを禁止し、約7ヶ月学校に行ける事が出来ませんでした。アフガニスタンからイランを経て日本へ避難する中で、約1年間学校から離れていました。

日本では高校を卒業することができましたが、その後は経済的な理由からすぐに大学へ進学することができず、2年間、勉強とアルバイトを頑張りました。その期間は精神的にも難しい時期でしたが、一方でボランティア活動や講演を通じて、アフガニスタンの現状や女性の教育・権利について話すことで自分には頑張る責任を感じて、モチベーションと励ましになりました。

現在は大学で国際関係を学んでいます。アフガニスタンと日本という異なる環境で育った経験から、人権やジェンダー平等、女性のエンパワーメントについて深く関心を持つようになりました。将来は、女性の権利やジェンダー平等の課題に取り組む分野で働き、日本社会の一員として国内外で積極的に活動していきたいと考えています。

タリクさん（アフガニスタン出身、情報科学）



2021年にタリバンが再び権力を掌握したことで、私の人生は他の多くのの人々と同様、突然、劇的に変わりました。未来は不透明になり、かつて夢見ていた多くの機会が一夜にして消え去ったかのような感じでした。

そのような中で日本へ来たことは、私にとって単なる場所の移動ではなく、私の人生における転機となりました。

新しい言語や文化、教育制度に適応しなければならず、孤独感や文化の違い、慣れない環境での成功へのプレッシャーなど、多くの困難がありました。しかし、粘り強さや周囲の方々の支えや「より良い未来を築きたい」という思いに支えられ、高校を卒業することができました。こうした経験から、教育は単なる個人の成功のためだけではなく、人生や地域社会を再建する力になるのだと強く感じています。

大学ではコンピュータサイエンスを専攻する予定です。私は、テクノロジーには現実社会の課題を解決し、人々をつなぐ力があると信じています。将来は、教育や情報へのアクセスを広げるシステムやツールの開発を通じて、私と同じように困難な状況に置かれた若者たちを支えたいと考えています

ヘイントイレインテツさん （ミャンマー出身、国際教養学）



私はミャンマー出身で、内戦や政治的混乱の中で人生を歩んできました。その影響は生活の不便さだけではなく、人の心や人生そのものを大きく変えてしまうものです。私のいとこの一人は、軍に対するデモに参加する中で友人を亡くし、「自分が関わったことで友人が亡くなったのではないか」という罪悪感に苦しむようになりました。また、家族の一人は命の危険を感じて遠く離れた土地へ逃れなければならない、私たちは経済的な抑圧の中で生活し、将来への希望さえ見えにくい状況に置かれてきました。

そのような現実の中で、私は何度も無力さを感じました。しかし同時に、「この状況を変えたい」「人々の生活を支えられる存在になりたい」という強い思いが心の中に生まれました。困難な環境の中でも学び続けることで、自分自身だけでなく、社会の未来を変える力を身につけたいと強く願うようになりました。

大学では機械工学を学びたいと考えています。ミャンマーでは停電が頻繁に起こり、交通や産業の基盤も十分ではありません。私は、エネルギーやインフラに関する技術を学び、人々が安心して暮らせる環境づくりに貢献したいです。将来は機械エンジニアとして、ミャンマーの復興と発展に自分の力を役立てたいと考えています。

Aさん（ミャンマー出身、看護学）



このような貴重な奨学金をご支援いただき、心より感謝申し上げます。皆さまのおかげで、安心して学業に専念することができています。

私の出身地では、現在も内戦の影響が続いており、非常に不安定な状況にあります。

2021年の軍事クーデター以降、インターネットg遮断され、現在も安定して利用することが難しい状況です。また、空爆への不安もあり、隣の村では軍によって家が燃やされる被害も起きました。

私の村には病院がなく、病気やけがをした場合、4時間ほどかけて遠くの病院に行かなければなりません。そのため、適切な医療を受けることが難しい状況です。親せきの中には、病気についての知識が十分ではなかったために、小さなけがが悪化し、深刻な状態になってしまったことがありました。そのとき、近くに病院がなく、さらに戦争の影響で状況も悪く、治療を受けることがとても大変でした。加えて、経済的な負担も大きく、家族全体がとても困りました。

この経験から、私は正しい健康や医療の知識を多くの人に伝え、病気の予防や早めの対応ができる社会をつくりたいと強く思うようになりました。

イティンザーピョーさん（ミャンマー出身、農学）



祖国では五年前、平和と自由を失い、多くの人々が希望を見失いました。教育、経済、医療など多くの分野が停滞し、私たち若者も未来を見失った状態で過ごさなければなりません。以前は勉強に励み、夢に向かって進んでいた道が、突然途絶えてしまったのです。毎日が不安と恐れの中にありましたが、「どんな状況でも学び続けることをやめてはいけない」という信念だけは手放しませんでした。

経済的に恵まれた課程ではありませんでしたが、新聞奨学生として日本で学ぶ機会を得ることができました。現在は、大学で応用植物科学を専攻し、遺伝学や植物育種に関心を持って学業に励んでおります。世界的な気候変動や人口増加によって食料問題が深刻化する中、遺伝技術は持続可能な農業の鍵を握ると考えています。

将来は大学教員として研究を続けながら、次世代に農業の知識を伝え、ミャンマーと日本の両国の農業発展に貢献したいと思っています。これまで多くの困難がありましたが、日本で出会った友人や支援者の皆さまのおかげで、再び夢に向かって歩み始めることができました。これから全力で走り続けたいと思います。

Ｌさん（アフガニスタン出身、経済学）

この1年間の大学生活は、これまでとは大きく異なる環境の中での挑戦でした。大学では、自ら主体的に学びを深めることが求められ、高校までの学びとの違いを強く感じました。私は高校時代まで英語を中心に勉強してきましたが、大学では経済学部に進学し、数学的な知識を必要とする分野に挑戦しています。

最初は授業についていくことも難しく、何度も壁にぶつかりました。しかし、新たに教材を購入し、自分で学ぶ時間を増やすなど、試行錯誤を重ねながら学び続けてきました。決して楽な道のりではありませんでしたが、自分で選んだ進路であること、そして応援してくださる方々の存在を支えに、1年間を乗り越えることができました。また、こうして安心して学べる環境が決して当たり前ではないことも、日々実感しています。

2年生では、より専門的な経済学を学ぶとともに、ゼミ活動やインターンシップにも積極的に取り組みたいと考えています。また、大学に入ってから、「将来は自分も、学びの機会を得ることが難しい学生を支える存在になりたい」という新たな目標を持つようになりました。私自身が支えていただいた経験があるからこそ、次は支える側として社会に貢献できるよう、これからも努力を続けていきたいと思っています。

ズェピエさん（ミャンマー出身、経営学）

私はミャンマーの大学で4年生として学び、卒業に向けて研究プロジェクトにも参加していました。当時は、まもなく学位を取得できると信じていました。しかし、母国で突然政治情勢が大きく変化し、学業は中断を余儀なくされました。取り組んでいた研究も止まり、自宅で安全かつ快適に暮らせることさえ、私が当然のこととして受け止めていたのだと気づかされました。悩んだ末、私は自分の価値観に基づき、以前の大学には戻らず、日本で新たに学び直す道を選びました。

日本ではまず1年以上日本語学校に通い、その後、大学で一から学び直しています。ミャンマーではすでに大学課程の後半まで進んでいたため、新入生として再出発することは簡単な決断ではありませんでした。しかし、学業を続けることが自分の将来にとって最も重要な一歩だと信じていました。この経験を通して、新しい環境への適応力や自立心、異なる言語で学ぶ力を身につけ、自信を持てるようになりました。

現在は大学で経済学を専攻し、特に金融分野に関心を持っています。金融は多くの産業を支え、社会の安定に貢献する分野だと考えているからです。将来は、英語と日本語の両方を活かせる企業で働き、国と国をつなぎ、実践的な形で社会に貢献できるキャリアを築いていきたいです。

ゲラさん

（ウクライナ出身、異文化コミュニケーション学）



この1年間 私は異なる環境の中で自分の価値をどう発揮できるのかということに向き合ってきました。多様な価値観への理解を含めていました。TOEICも受験して高得点を取得しました。英語で考え、英語でアウトプットする力を実践 レベルまで高めることができました。またアルバイトは責任ある役割を任される中で、周囲との信頼関係を築きながら自ら行動する力を磨いてきました。また次の1年は、これまでの経験を土台にして、より主体的に挑戦していきたいと考えています。例えば、インターンを通じて社会に出るための実践的な経験を手に入れ、自分の武器にしたいと思っています。この1年でチャンスを待つだけでなく 自分から取りに行きます。学びを結果につなげる1年にしていきます。

授与式の様子▶



カイン ミミ トウッさん（ミャンマー出身、看護学）



私は昨年4月に看護学部へ入学し、この1年間、看護とは何か、患者さんに寄り添うとはどういうことかを考えながら大学生活を送ってきました。授業や演習では、基礎看護技術や看護援助論を中心に学び、患者さんを「疾患」ではなく「生活者」として捉える視点の大切さを実感しました。

また、学業と並行してアルバイトにも取り組み、時間管理や責任感を身につけることができました。グループワークやコミュニケーションの学びを通して、相手を尊重しながら関わる力も成長したと感じています。

今後は、より専門的な知識と実践力を身につけるとともに、多様な背景をもつ患者さん一人ひとりに寄り添える看護師になることを目標としています。この1年は、自分の課題と向き合いながら、さらに成長できる1年にしたいと考えています。

ウィンさん（ミャンマー出身、看護学部）



皆さまのおかげで生活面での不安が軽減され、勉学に集中することができました。この1年間は、自分の目標や進むべき道を見つけることができた一年でした。

大学では専門科目の学びが始まり、看護とは単に患者をケアするだけではなく、「その人が本来持っている力を引き出す支援である」という先生のお話が特に印象に残っています。授業では、体の仕組みや患者支援について学び、特に「解剖学」や「生理学」は、私が最も興味を持って取り組んだ授業です。進級に必要な試験に合格できるよう、計画的に勉強を続けています。

授業以外では、医療系サークルで中高生にBLS（一次救命処置）を教える活動に参加し、医療知識を分かりやすく伝える力や、多職種と協力する力を学びました。また、大学の研修プログラムでフィリピン大学を訪問し、教育格差や栄養不足などの課題について現地大学生と協力しながらボランティア活動やディスカッションを行いました。

今後は、専門科目や実習に真剣に取り組みながら、患者一人ひとりに真摯に向き合い、信頼され、支えとなる看護師になりたいです。

ヤダナさん（ミャンマー出身、日本語・日本文化学）



大学で日本語・日本文化学を学んでいるヤダナと申します。本日は、私の大学生活の様子と今後の目標についてお話しさせていただきます。2025年度は、自分の将来の進路を考える上で大きな影響を受けた一年でした。大学生活では、私の専門である日本語・日本文化の授業に取り組むとともに、日本人学生や留学生との交流、そして学類の新入生へのサポートにも関わってきました。また、日本語教育に関するさまざまな科目を履修する中で、特に外国人児童生徒への支援に強い関心を持つようになりました。私自身、日本での生活が1年半ほどになりますが、その経験を通して、日本で生活するためには言語指導だけでなく、生活面や精神面を含めた支援が必要であると実感しました。一方で、2025年度は思うようにいかない時期もありましたが、その経験を通して生活を見直し、物事にしっかり向き合うことの大切さを学びました。今年度は、昨年度の反省を活かし、学業・健康・アルバイト・活動のバランスをしっかり取りながら、自分の将来に向けた専門性をさらに高めていきたいと考えています。

モー テッシンさん
（ミャンマー出身、工学部(機械・電気工学)）



昨年度に続き奨学金のご支援をいただき、心より深く感謝申し上げます。

私はこの奨学金をいただいたとき、将来への不安が大きく軽くなり、「これで学び続けられる」という安心感で胸がいっぱいになりました。そのときの気持ちは、今でも忘れることができません。

その安心感があったからこそ、この1年間は学業に集中するだけでなく、日本の小学校・中学校・高校でミャンマー文化を伝える活動や、大阪・関西万博関連のイベントに参加するなど、新しい挑戦に踏み出すことができました。

現在は3年生となり、就職活動を始めています。将来は、かつての私のように、教育の機会に不安を抱える人々を支えられる存在になりたいと強く思っています。そして、その大切さをSNSを通して発信し、支援の輪を広げていきたいです。

この奨学金からいただいた「安心」と「挑戦する勇気」を、今度は私が誰かに届けられるよう、これからも努力してまいります。



◀授与式の様子

ネーさん（ミャンマー出身、工学部(機械・電気工学)）



渡邊利三国際奨学金のおかげで、心配をせずに勉強に集中することができました。その結果、大学でも良い成績をとることができ、50%の授業料減免をいただくことができました。

また、勉強だけでなく、大阪万博や岡山でのインターンシップ、企業とのプロジェクトなど、たくさんの良い経験ができました。これらはすべて、この奨学金の支えがあったからこそです。

将来は大学教授を目指しています。今も大学でティーチングアシスタントとして働きながら、将来のために頑張っています。日本で学んだことを活かして、日本の社会や母国の役に立ちたいと思っています。

最後に、あらためて皆さまの優しいご支援に感謝いたします。

バドルさん（シリア出身、工学部）

去年は3年生になって専門科目の学習が本格的に始まって、難しさを感じる場面が多くなりましたが、その中で将来につながる貴重な経験を得ることができたと思います。この経験を今度は仕事に活かしていきたいと考えております。授業だけではなく、ロボット研究室にも参加して、去年は友人と協力してボール回収のロボットの制作に取り組む予定でした。私はプログラミングを担当することになっておりましたが、足をケガしてしまったため、残念ながらプロジェクトは中止になってしまいました。現在は資格試験の勉強と並行して、就職活動に向けて努力を続けたいと思っております。最後に、渡邊利三国際奨学金とパスウェイズ・ジャパン、これまでご支援くださった皆様に心より感謝申し上げます。

Tさん（ミャンマー出身、英語英文学）



こんにちは。

私は英語英文学科の最終学年に在籍しております。

この一年間は、勉強と研究にしっかり時間を使うことができ、とても充実した大学生活を送ることができました。

まず、渡邊利三国際奨学金の皆様に、心より感謝申し上げます。

皆様のご支援のおかげで、安心して勉強に集中することができました。

また、大学では学生スタッフとして活動し、日本人学生の英語学習のお手伝いをする機会をいただきました。

さらに、ミャンマーの学生が大学に出願する際のサポートも行いました。

自分にできることで誰かの役に立てたことを、とても嬉しく思っております。

今年は大学院への進学を目指して準備を進めています。

将来は教師になりたいと考えておりますので、これからも勉強を頑張っていきたいと思っております。

また、学生リーダーにも選んでいただきましたので、大学の学生のために精一杯頑張りたいと思っております。

そして、日本とミャンマーをつなぐ架け橋になれるよう、これからも努力してまいります。

ヘイン イェ セさん
（ミャンマー出身、工学部（建築学））



この度は、渡邊利三国際奨学金に選んでいただき、誠にありがとうございます。

私はこの奨学金授与式に参加できる機会が最終回になりました。これまでの4年間も、大変お世話になりました。

去年の1年間として、夏休みから多くの会社にインターンシップに行き、就職活動を行いました。今年2月に自分は興味がある構造設計の仕事で、会社から内定をもらい、就職が決定されました。

今後4年生に、コンクリート床版の非破壊試験を研究テーマとして、コンクリートを壊さずに、コンクリートの強度やひび割れの深さなどを調べる研究活動を行います。

そして、大学でSAとして、授業の実習を担当したり、後輩をサポートしたりしております。

今後は研究を頑張り、社会に貢献できるように頑張っていきます。将来、母国が安定したら、国に戻り日本で学んだ技術を活かし、携わりたいと思います。

授与式の様子▶



Pさん（ミャンマー出身、国際教養学部卒業）

今年の3月に大阪の大学を卒業しました。私は日本語教師になりたいという夢があったので、4年生の時は日本語教員養成講座にも通いました。大学との両立は簡単ではありませんでしたが、生活面でも支えていただいたおかげで勉強に専念できました。そして2024年10月に行われたパスウェイズ・ジャパンの就職活動に関するセミナーに参加したことがきっかけで、3年生のうちに無事にいくつか内定をいただきました。その中で、事務局の皆さんと何度も相談にのっていただいて、自分に合った進路を選ぶことができました。そして、この4月から東海地方の日本語学校で日本語教師として働いています。まだ慣れないことも多いですが、日々学びながら努力しています。今後は、ミャンマーで自分の日本語学校を開きたいと思います。ここまで来ることができたのは本当に、この渡邊利三国際奨学金をくださった皆様のおかげです。私にとって夢を叶える大きな支えになりました。最後に改めて本当にありがとうございました。

ハンさん

（ミャンマー出身、大学院修士課程（理工学）修了）

まず初めに、渡邊利三国際奨学金を通じて多大なご支援を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。大学生活を振り返りますと、困難も多くありましたが、それ以上に大変充実した日々でした。電気工学、特にプラズマ科学や光計測の分野について深く学び、研究活動を通じて専門知識と問題解決能力を大きく高めることができました。また、在学中に2本の研究論文を発表することができたことは、私にとって非常に大きな成果であり、自信につながっています。

この1年間は、修士研究の完成に加え、就職活動や自己成長にも力を入れてまいりました。これらの経験を通して、粘り強さや柔軟性、そしてコミュニケーションの重要性を学びました。

現在は研究開発部門のプロセスエンジニアとして働いており、大学で培った知識を実社会の課題解決に活かしていきたいと考えております。将来的には、研究者・技術者としてさらに成長し、社会に貢献できる人材になることを目標としております。

最後になりますが、これまでの温かいご支援に改めて深く感謝申し上げます。

ハージャさん

（アフガニスタン出身、英語コミュニケーション学科）

大学に進学することは私にとって大きな夢でした。なぜなら私の家族には大学を卒業した人がおらず、長く続く戦争や困難の中で学びを諦め、生きるために必死に働いていました。今アフガニスタンではタリバンの影響により、女性は6年生以上になると学校に通うことはできない状況にあります。その中で日本で大学に通えることは私にとって本当に特別な機会でした。

しかし1年生の時はアルバイトと勉強の両立が難しく、アルバイトだけで学費を払うことはできず、大学をやめようと考えたこともありました。それでも渡邊利三国際奨学金に出会い学び続けることができました。渡邊利三国際奨学金のおかげで2年生からは学業に集中できるようになり、卒業論文やサークル活動、イベント、他の学生との交流にも積極的に取り込むことができました。また就職活動を通して多くのことを学びました。多くの会社に応募し面接を受ける中で、うまくいかないこともたくさんあって、日本での就職活動の難しさを感じました。

現在は日本での就職活動に向かって様々な資格取得に取り組んでいます。日本語能力検定試験N1の取得も目標に、さらに努力を続けています。これからは言語や情報で困ってる人を支え、地域社会や世界に貢献できるように努力していきます。そして最後に渡邊利三国際奨学金のご支援に心より感謝申し上げます。経済的な支援だけでなく相談に乗っていただいたり、様々な場面で支えていただいたことに深く感謝しています。このように若者の夢を支える活動がこれからも続いていくことを願っています。私自身も将来困ってる人を支え、社会に役立てる人になるように努力していきます。

アルヘスワネさん（シリア出身、工学部卒業）



この4年間サポートし続けて、心より大変感謝しております。おかげさまで、日本に来る目的を達成でき、無事に卒業できました。大学4年生の1年間では、主に研究に取り組んでいました。私の研究は機械学習と画像処理を使って、川の水位を予測し、洪水になる前にアラートするシステムです。

また、日本会社で長期インターンシップをしていました。

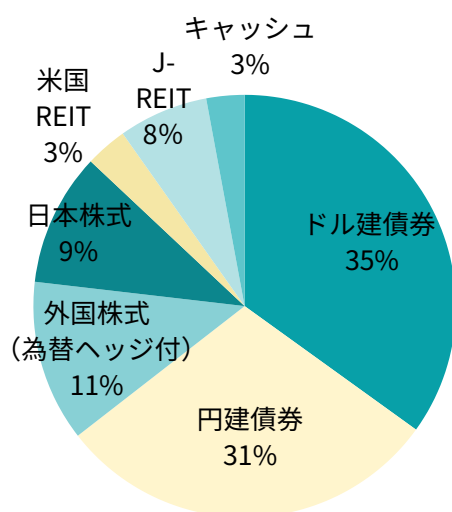
今月は社会人になって、これからの目標は、自分が持っている能力を活かし、平和に向けて、日本とシリアの架け橋になることです。改めて、今までご支援してくださり、誠にありがとうございました。

奨学金基金運用と助成の推移

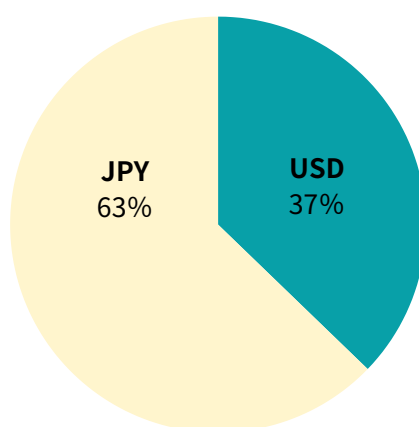
年度	寄付受領時 (2022年12月)	2022年度末	2023年度末	2024年度末	2025年度末
期末資産額	1,000,000,000	993,705,975	1,110,836,979	1,110,367,805	1,171,626,463
当初金額費		99.37%	111.08%	111.04%	117.16%
前年度比		99.37%	111.79%	99.96%	105.52%
年度助成額		956,300	9,658,000	15,730,220	21,984,750
年度運営費		1,125,313	10,329,052	12,024,721	6,195,566
年度支出計		2,081,613	19,987,052	27,754,941	28,180,316
資産に対する支出割合		0.20%	1.80%	2.50%	2.40%

奨学金基金運用と助成の推移

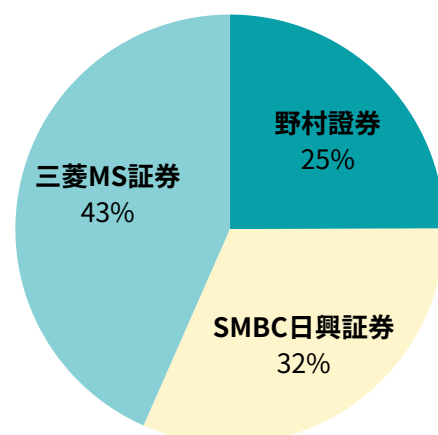
資産配分



通貨比率



金融機関別比率



渡邊利三国際奨学金 新たな寄付金による基金増額のお知らせ

公益財団法人パスウェイズ・ジャパンでは、これまで渡邊利三氏の寛大なご寄付により、「渡邊利三国際奨学金」を2021年より提供し、日本に暮らす難民の背景を持つ若者の高等教育進学を支援してきました。これまでの奨学生の累計は、のべ72名に上り、今年度も25名の奨学生として支えています。

奨学金設立5年目を迎える今年、渡邊利三氏より新たに700万米ドル（約11億円）を、奨学金基金としてご寄付いただきました。今後従来の基金10億円と併せて当財団で資産運用を行い、その運用益を活用して永続的に難民・避難民の若者達に奨学金を提供していく予定です。

今回の基金の増額により、パスウェイズ・ジャパンでは、これらの若者達の学び続けたいとの思いに応え、より多くの人々に高等教育進学を提供していきます。そして、一人ひとりが自ら思い描くキャリアを実現し、日本社会の一員として活躍できるよう、支援を続けていきます。



2025年度授与式の様子（前列中央 渡邊利三氏）

団体概要

団体名	公益財団法人 パスウェイズ・ジャパン（Pathways Japan PJ）
設立	2021年7月7日 一般財団法人設立 2024年10月1日 公益財団法人として認定
所在地	〒112-0004 東京都文京区後楽2-16-5 福永ビル4階
代表理事	折居 徳正
TEL	03-6555-3193

役員一覧

評議員	藤田 直介	弁護士
	功能 聡子	ARUN 合同会社代表
	奥野 由紀子	東京都立大学教授
名誉会長	渡邊 利三	
理事	折居 徳正	当財団代表理事
	井内 摂男	団体役員
	石井 宏明	特定非営利活動法人Mobility for Humanity共同代表
	鈴木 真代	SocialConnection for Human Rights共同創設者
	津田 和泉	公益社団法人難民起業サポートファンド理事
監事	長谷部 美佳	明治学院大学准教授
	根本 剛史	弁護士
	藤澤 祐貴	公認会計士
顧問	石川 えり	団体役員

 www.pathways-j.org

 @pathwaysjapanPJ

 @pathways_japan

 @pathwaysjapan

 公益財団法人
パスウェイズ・ジャパン
PATHWAYS JAPAN